

局面、流動的に展開のきさし

「全明全共闘」が結成

13日社学同、反帝は参加せず

夏休みもいよいよ終盤を迎え、十月一日の授業再開前に「これまで比較的静かだった本学のバリ・スタの局面もいよいよ流動的になり事態は進展しつつある。学生側では五の全明全共闘結成を任さみ・二部合同して全明全共闘を結成する機運が盛り上がったが、最大セクトである社学同統一派と同M派の意見が真向うから対立し、結局社学同・反帝陣営の不参加のまま全明全共闘が十三日結成された。このためセクト間の反発はさらに強く内ゲバの心配もあり、これに対する「セクトの不満も見られるなど、不穏な雰囲気にも包まれている。また、体育会は駿河台本館から中央大学の全中闘、青山学院大学の全学闘の退去を要求し、一部全学闘(福田直人代表)との間で十日まで撤去する旨の種約書をつぶさる意向に動き出している。当局も対策本部・運営委員会など働き、二十日以降に全学集会(教職員)を開催することに決めた。このような局面の流動化に併ない、今月下旬から十月十日前にかけて何らかの状況の進展が見られるものと注目されている。

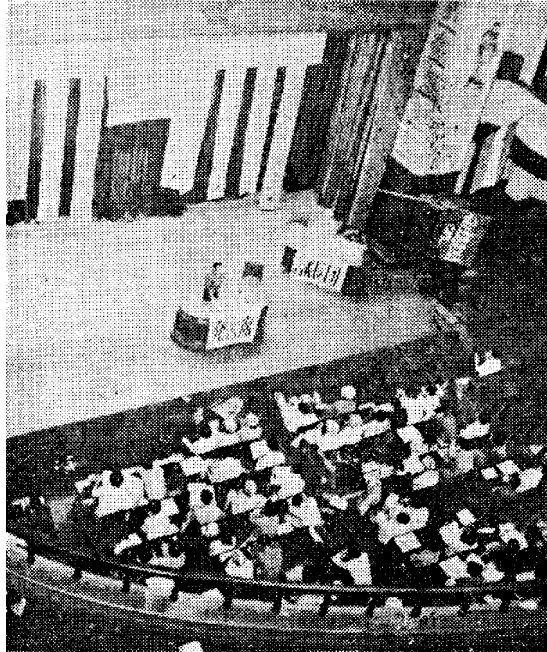
20日以降に教職員集会

全明全共闘結成会は、十三日(地味)は除く)が参加した(午後五時より駿河台校記念館)であった。(写真)

加藤教員部の明大版とも争う大(取捨行動を助長する)の三派が(学改準備委員会を解体し、紛争)すでに決定しており、組織形態)とが確認されている。

しては中央書局体制をとり、各(学部闘争委員)二名、一・二部サ(クル連合)二名、一・二部サ

開かれ、議長に樋口成一君(二部商大闘三年)を、副議長に坪井花子君(二部商大闘二年)を選出した。参加者は約二〇〇名で、反プロトが大団結する手帳を渡していたが、M.L.中核とそのシンパが参加するにせよ、注目を集めた。この内からの闘争手段をめぐり、



この内からの闘争手段をめぐり、